

2014年11月18日

第2回合同勉強会動物園学セミナー報告書

文責：櫻庭陽子

2014年11月7日(金)に霊長類研究所と日本モンキーセンターと合同で「第二回動物園学セミナー」を開催した。私は主催側の中でチラシ作成と写真撮影役として関わった。第一回目は霊長類研究所内の大会議室でおこなったが、今回はモンキーセンター内にあるセミナーハウスを会場とした。当初は寒さが危惧されたが、約30人もの方が参加し、その熱気で寒さは感じられなかった。また、おなかのすく時間帯であったが、温かい飲み物やお菓子を用意したことで緩和されたと思われる。

前半はモンキーセンターの奥村さんと霊長類研究所の木下さんの口頭発表であった。先に奥村さんがタンザニア渡航の報告をしてくださった。奥村さんの発表で印象に残っていることは、「チンパンジーやヒヒが間近を歩いていて怖かった。」とおっしゃっていたことである。個人的にはこの感情はもっともなことで普通だと思っている。私も2011年にタンザニアに行かせていただいたときに、チンパンジーたちが私たちのすぐ横を通っていったときは生きた心地がしなかったことを覚えている。もちろんこれは私たちがチンパンジーたちの通り道を邪魔していたために起こったことであり、自業自得である。しかし日本の多くの方は「恐怖」を感じるどころか、触りたい、餌を与えたい、などヒト以外の動物との距離の取り方を知らないことが多いと感じる。そういう意味では、飼育に携わっている人は、その距離感を常に取り訓練をしている、むしろせざるを得ない状況である。その中で私がさらに考えたことは、動物との距離感を知らない多くの人たちにその距離感を持つてもらうためにはどうしたらよいのだろうかというものだった。ひとつはこのように野生動物が暮らしている場所に行き、「野生の状態」を体験してもらうことだと思う。柵や堀で仕切られていない、自然の中で生きているヒト以外の動物たちの大きさや動きを間近で見ることで、そのすばらしさとともに畏怖の念を抱くのではないかと感じた。もちろん全員が野生の状態を体験できるわけではないので、それを身近で体験できる場所として、動物園は重要だと思う。まさに動物園は野生への窓である。

次の木下さんの発表は、以前モンキーセンターで開催された日曜サロンを少し改変したものであった。ここで印象に残ったことは、「赤ちゃんが生まれたら終わりではない。その赤ちゃんが無事にオトナになり、次の世代をきちんと産み、育てるところまで見ていかないといけない。」という言葉であった。この言葉から「繁殖」に終わりはないのだと感じた。これはヒトでも同じであり、両親、祖父母、その前の祖先たちがこどもを産み育ててきた



からこそ、今の自分があることを改めて実感することができた。しかしそれはヒトの世界で生きてきたからこそできたことであり、自然の環境に適応したヒト以外の動物たちが、ヒトの世界で子どもを産み、育てるといふことの難しさが木下さんの発表からひしひしと感じられた。動物園の人たちも繁殖には苦心しているだろう。一部ではなかなか繁殖できず、一部では繁殖しすぎて血縁関係が濃くなってしまふ、あるところでは子どもは生まれたが、母親の母乳が出ない・育児拒否などで人工保育になり、オトナになっても育児ができず次の世代につながらない、などさまざまな事例が実際に起こっている。「繁殖にはこのようなさまざまな壁があり、それをクリアすると、ようやく繁殖に成功したといえる。」と、日曜サロンでは特に強調して伝えた木下さんはおっしゃっていた。当たり前のことのはずが、私はすっかり忘れていた。動物福祉を学ぶ人間としてとても恥ずかしいと感じるとともに、より強くそのことを念頭に置きながらより精進できるとも感じた。大変勉強になった。

後半は実際にフィーダーを作るワークショップをおこなった。前回は全員で消防ホースのハンモックを数個作っただけだったが、今回はチームを作り、チームごとにフィーダーを作るという方法を取った。さらに作成したフィーダーを全員の前で実際に使ってみせ、ディスカッションもおこなった。最初は多種多様な材料を前にそれぞれのチームは頭を悩ませていたが、橋本さんと藤森さんが持ってきた見本も参考にしながら、徐々に自分たちが担当する霊長類を思い浮かべながら熱心にフィーダーを作り始めた。熱心に作っていたこともあり、予定していた時間を10分ほど過ぎてからようやく発表会にうつった。発表会では、チームの中のサル役の人が実際に作成したフィーダーを使って見せた。すると他のチームから「これは獣舎のどこにつけるの?」「食べ物をセットする労力が大きいわりにサルはすぐ取ってしまつては人のモチベーションが下がる。」「このフィーダーは固形物を入れるよりはハチミツをいれるとよい。」「透明の塩ビ管だと中身が見えていいね。」など、さまざまな意見が飛び交い、ディスカッションは大いに盛り上がった。最後にフィーダーを取り付けた後の評価の大切さについて橋本さんと藤森さんからレクチャーがあった。そのときに質問として上がったことが「評価の方法」だった。1-0 サンプリング、スキャンサンプリングの方法だけでなく、記録用紙の作り方や記録の仕方など、今後はその辺りが課題だと感じた。結局予定していたセミナー終了時刻を1時間以上もオーバーして終了した。

前回は京都市動物園の島田さんが参加してくださったりしたが、今回は他の動物園からの参加はなかった。しかし個人的なお誘いで霊長類を扱っている製薬会社の方が来てくださったり、霊長類研究所のほうからも学生や研究者が多数参加し、積極的な意見交換ができた。頭と体を動かしながらおこなうことで、実感を伴った学習ができ、飼育の方でも参加しやすい環境だと改めて感じた。参加者からはとてもすばらしい、楽しいセミナーだとの意見もいただいた。今後も継続・発展させて、より多くの霊長類たちの福祉向上につながるよう私も努力していきたい。

<写真>



奥村さんの発表と会場の様子



木下さんの発表の様子



飲み物と軽食も用意



チームに分かれフィーダー作成に取り掛かるころ



フィーダーが徐々に完成に近づいている



作成したフィーダーを実際に使い、ディスカッションをする



フィーダーを取り付けてからの評価の大切さを、橋本さんと藤森さんがレクチャー